

## 嶋本昭三先生(具体美術)を論ずる

1987年、いまココムで東芝事件という一種の貿易摩擦が連日のようにテレビ、新聞、ラジオをにぎわせている。いわゆる先鋭技術というものの経済価値と政治力とのシガラミであろうことは想像がつくが、要するに、日本経済が不振で輸出できないとなれば、ココム貿易摩擦も起きない問題である。そういう意味において、いま日本文化は、その精髓であるといわれる前衛の世界の作家たちは世界に向けてヘイオン無事である。そのことを日本経済に照射する時、前衛作家の存在は無にひとしい。だからといって存在しないわけでもない。例えば1987年の「美術手帖」年鑑をみれば1ページ30名と低く見積って313ページの氏名が掲載され9,390、およそ1万人の名前が登録され盛大なものである。に加え同年鑑のトップに「近現代日本美術の海外への進出」と題して三木多聞先生が書いた。美術の方も摩擦、進出、輸出となると、いったいどのような意味をもつのであろうか。的確に言って日本にいて、作品が海外に売れているのだろうか。素人が見ても、玄人が見ても、日本にいる作家の作品がオートバイ、先端技術商品のように輸出されているのであろうか。確かに国際展は沢山あり、交流は行われていた。にもかかわらず文化、特に美術品は一方的輸入ではなかつたのだろうか。それも屈辱的輸入、名画一点をいれて有名になり、それで観客動員が出来たという状況を、いまだに許しているのは地場産業の脆弱さか、日本のオートバイが欧米のオートバイ産業を壊滅させてしまったよう。欧米美術作品によって、すでに日本の美術は壊滅してしまっていたのかという疑問にたちいたるのである。

卒直にいて日本に輸出する物がないのであろうか。確かに仏像・版画、いまの感覚でいえば日本の伝統もの、コットウ物は輸出された時代を持っていた。しかし、私が知りたいのは現代美術である。この輸出を、いわゆる貿易摩擦を引き起こした現代の先端意識の精神構造たり得る絵画なり、美意識の美術が本当に日本にはあるのだろうかという素朴な自問なのである。私の見る限りにおいて実質的に日本の現代美術が海外に輸出されているという事実は、不幸にして私は知らない。それに反して新しく建てられた美術館にはトゥトウとして、モダンアートが流入してきて日本の前衛作家を刺激している。それもいいことである。決して悪かろう筈がない。なにを言おう、遅かれ早かれ私も、その一員であることに変わりはない。しかし本当には輸出するものはないのか。美術をつかまえて簡単に輸出、輸入なんて、安易な言葉を使うことだけでも私は現代美術を語る資格を持たないのかもしれないが、一応、実作者、いわゆる、私も絵を描いて売って生活しているもの一人であってみれば、そう、お高いところに止まって、日本美術界をヘイゲイすることも出来ない。本当に日本には輸出するものはないのかと心配するのである。例えば、輸入するにしてもまずはそれに対しての知識が要求される。輸入する品目の用途、値段、需要調査等、素人が考えても判るぐらい沢山のいわゆる関心があるのである。